

中国華北地方北朝後期仏教の考古学的研究 —河北省響堂山石窟を中心に—

篠原典生

中央民族大学民族学与社会学学院文博系 外籍教師

緒言

仏教は2世紀頃にはすでに中国に伝来しており、五胡十六国時代を経て南北朝時代に飛躍的な発展を遂げた。北朝の中心地であった華北地方には国家主導で造営された巨大石窟寺院が今なお威容を誇っている。大同の雲岡石窟、洛陽の龍門石窟はそれぞれが時代を代表する仏教遺跡としてよく知られており、また河北省と河南省の境に位置する響堂山石窟は北齊王室と関わりが深く、まさに北朝後期を代表する石窟と言える。特に北響堂山石窟北洞は規模も大きく決して雲岡や龍門にひけをとらない。

雲岡、龍門、響堂山については、1930年代から水野清一、長廣敏雄両氏による調査がおこなわれ、詳細な調査報告が出版されている。その後、日中両国の研究者を中心にそれぞれの石窟について様々な論考が発表され、また雲岡から龍門への継承、発展についても様々な方面から論じられてきた。

本研究ではこうした先行研究の成果をふまえ、佛教考古学の方法論によって個々の石窟について調査をおこない、同時に各地方の佛教造像の発展と相互の影響関係などにも目を向け、現状残されている仏教遺跡という「モノ」の面から北朝佛教の系譜を探る。

調査方法

まず華北地方の北朝仏教遺跡について、既存の研究をもとに石窟や造像碑、一括出土地点などのリストアップをおこなった。それをもとに各省ごとに調査、資料収集をおこなった。また、雲岡から龍門、龍門から響堂山という二つのルートを設定し、歴史地理学の成果を利用して、具体的な調査対象および調査範囲を設定した。華北地方の現地調査においては、雲岡、龍門、響堂山を中心に、それぞれの周辺地域に存在する小規模石窟の調査をおこなった。また響堂山に対する西域の影響を見るために、キジル石窟とトクク石窟の中心柱窟の構造に着目

して調査をおこなった。

個々の具体的な洞窟について、「箱」（洞窟構造）と「中身」（装飾および造像など）という観点から観察、記録をおこない、それぞれの変遷について分析する。雲岡や響堂山など、規模が大きく、かつ複雑な構造の洞窟の調査にあたっては、高い位置にある構造物や造像の状況を現地で観察することは困難なため、既存の調査報告書などを十分に活用した。また、保存や安全の観点から立ち入りが制限されている洞窟や地域の調査に関しては、報告書の活用と同時に、現地調査をおこなわれた研究者の方から直接聞き取りをおこない、踏査の不足を補った。

造像碑や単体造像は、現在の所在地と制作地が必ずしも一致しているとは限らないが、各地で一括出土した仏像群は地域の特徴を考察するうえで貴重な資料を与えてくれる。そこで河北省曲陽修徳寺、山東省青州龍興寺、ギョウ城範囲内の北呉荘などから出土した仏像群について調査をおこない、石窟の「中身」を考える参考とした。

考察

1. 雲岡から龍門

まず、洞窟の構造について。雲岡第一期の曇曜五窟は先に建物を造ってその中に大仏を納めるというよりも、大仏を彫りぬいたあとの空間が石窟になっている、という水野、長廣報告の見解はまさに卓見である。窟内に余計な装飾を施さないこうした構造は雲岡第一期にのみ見られる傾向で、他には例がない（図1）。雲岡第二期には洞窟の中心に仏塔を象徴するとされる方柱を彫り残した中心柱窟と、巨大な座仏を本尊とする仏殿窟などがあらわれ、窟内すべてに造像や装飾が施されいっぺんの余白も残さない。曇曜が翻訳した仏典に典拠が求められるモチーフが多く見られ、この時期の石窟こそ仏教者としての曇曜が理想とした佛教世界を体現していると考



図1 雲岡第十八洞



図2 雲岡第六窟（水野・長廣『雲岡石窟』第三巻より引用）

えられる（図2）。造像形式については、雲岡第二期にあらわれる「仏像の中国化」（図3）は孝文帝による漢化政策の影響とされ、その傾向は龍門石窟北魏窟に受け継がれ、さらなる発展が見られる。

ところが、龍門北魏窟には中心柱窟はひとつも見られない。宣文帝によって開かれた賓陽中洞（図4）は奥壁に本尊仏が座し、左右両壁にはそれぞれ脇侍仏が立つ三壁構造となっているが、こうした洞窟構造は雲岡石窟では龍門北魏窟と平行する雲岡三期に多く見られ、雲岡から龍門に影響したと断言することは難しい。

また、窟内外の仏龕や装飾の配置に関しても、雲岡第二期のような様々なモチーフが渾然一体となってひとつの空間を構成しているのとは異なり、本尊仏を中心にすっきりとした構成になっている。龍門賓陽中洞に見られる窟内装飾には天蓋（帷帳）、維摩文殊対問図、本生図、帝王皇妃供養図、十神図がある（図5）。このうち、



図3 雲岡第六窟（水野・長廣『雲岡石窟』第三巻より引用）



図4 龍門賓陽中洞

天蓋と本生図は雲岡に早い例が見られるが、維摩文殊対問図は賓陽洞中洞とほぼ同時期に現れており、帝王皇妃供養図と十神図に関しては雲岡には見られない。

造像形式に関しても、雲岡で中国式仏像に切り替わっていた時期に、龍門古陽洞ではいまだ雲岡の古い形式を保っている。こうした現象は、雲岡の造営活動が一



図5 寶陽中洞（『中国石窟 龍門石窟』図版より制作）

段落してからまとまった工人集団が洛陽に移っていった訳ではないことを示している。

このようにしてみると、龍門では全く新しい「箱」が用意され、「中身」も寶陽中洞の造営までには新しい要素が加えられていることがわかる。ただ、「中身」だけ見れば、龍門最初期には雲岡の影響が小さくなく、あるいは直接的な影響を受けていたことも無視できない。雲岡石窟のある北魏の旧都平城（今の大同）から、龍門石窟が開かれた新都洛陽の間を官吏や商人、僧侶など様々な人々が行き交い、その中に石を穿ち仏像を彫る工人たちも多く存在していたと考えられる。そのルート上にある高平県からは近年多くの北魏時代の石窟や摩崖造像が報告されており、なかでも大仏山造像は雲岡第一期から第二期にかけての造像の特徴と一致し、平城の工人の手によるものと考えられる。ただここでも注意されるのは、大仏山造像は一個の巨石に穿たれた平面的な仏龕形式であり、洞窟構造は存在しないということである。

2. 龍門から響堂山

響堂山では中心柱窟が再び現れるが、雲岡で見られたような方柱の四面すべてに龕を開く構造ではなく、正面と左右面の三面か、正面にひとつだけ龕をつくっている。方柱の背面はそのまま窟の奥壁に接続しており、下部に天井の低い通路を設けている（図6）。こうした正面にのみ龕を設ける中心柱窟はキジル石窟など西域の石窟構造によく似るが、ただこちらの中心柱窟は方柱にはならず、正面部分だけが高く、左右と背面に天井の低い通路を設けて回廊のようにしているため（図7）、全く同様の構造だとは言えない。トユク石窟の報告によれば、三面を彫りだし、背面に通廊をつける形式の洞窟が

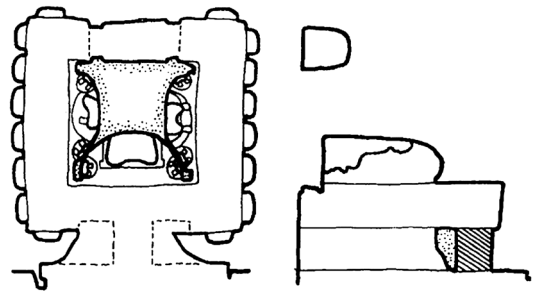


図6 北響堂山北洞（李裕群『北朝晩期石窟寺研究』より引用）

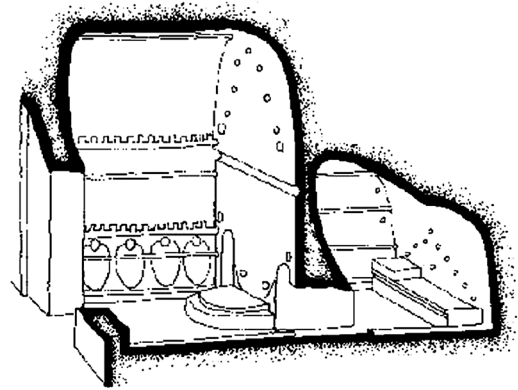


図7 キジル石窟（『中国美術全集 新疆石窟壁画』図版より制作）



図8 トユク石窟 K18（『新疆鄯善県吐峪溝東区北側石窟発掘簡報』より引用）

あるということだが、前室部がほぼ崩壊しているために元の様子は明らかではない（図8）。

造像形式も雲岡、龍門の伝統とは異なり、仏は再び古式の通肩をまとい、座姿も多様化する（図9）。菩薩は肉体の露出傾向があらわれ、これらは北魏の「漢化」に反発した北齊高氏による「鮮卑化」あるいは「胡化」の結果と考えられている。このように、響堂山石窟は極めて特殊な形式を持っており、従来この特殊性に着目した研究が多くなされてきた。

龍門から響堂山へのルート上にも数多くの石窟が存在するが、なかでも注目されるのが鞏県石窟である。洛



図9 北響堂山北洞

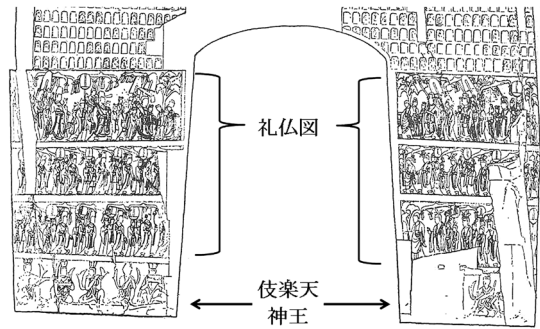


図11 鞏県石窟第一窟（『中国石窟 鞏県石窟』の図版より制作）



図10 鞏県石窟第四窟

陽市から東へ80 kmほどの鞏儀市に位置し、仏像は龍門賓陽中洞本尊の形式を踏襲していることが早くから指摘されてきた（図10）。ところが、鞏県石窟は中心柱窟であり、龍門とは完全に異なっている。つまり「箱」は全く違うが、「中身」は同じものなのである。しかも中心柱窟は洛陽地域ではほとんど見られず、非常に珍しい例となっている。では具体的な石窟構造を見ると、第四窟の中心柱は四面とも仏龕を上下二段に開いており、下段



図12 水浴寺

の一龕は釈迦多宝二仏並座像で、雲岡第六窟中心柱の構造と同じである。また、第一窟、第三窟、第四窟、そして中心柱窟ではない第五窟でも窟内に向かって右側（中心柱正面本尊から見た左）に菩薩像がある。この並び方は雲岡第六窟および雲岡第三期によく見られる形式であり、時間的に見てもほぼ同時期に現れている。ところが、菩薩像自体の形式は、雲岡では交脚であらわされるが、鞏県では右足を上にした跏趺坐の形である。これは龍門皇甫公窟や魏字洞と同じ形式であり、時期的にも重なる。要するに鞏県石窟は雲岡から「箱」を、龍門から「中身」をそれぞれ受け継ぎ、発展させたと考えられる。

この事実は石窟造営の具体的方法に関わる重要な問題であり、今後さらに検討を深めたい。

響堂山を見てみると、前述の如く同じ中心柱窟とはいえ、方柱式の鞏県石窟とは少し異なっており、直接的な影響関係を談じることはできず、むしろ西域系統の中心柱形式により近いように思える。造像形式も龍門、鞏県の形式とは大きく異なる。しかし、窟内装飾についてみると、龍門、鞏県および響堂山に共通項を見つけることができる。すなわち天蓋（帷帳）、帝王皇妃供養図、十神図の組み合わせである（図11）。窟龕上部に天蓋をあらわし、洞窟前壁窟門左右に帝王皇妃供養図（礼仏図）をあらわし、周壁と中心柱下部に十神（神王）を置く形式は鞏県石窟に共通しており、また北響堂山北洞と水浴寺も同様の構造である（図12）。ただ北響堂山北洞の前壁は破壊がひどく、図像の彫りも浅いために年代や内容の判断には慎重を要する。とはいえ「中身」の組み合わせの面では龍門から鞏県、響堂山へという道筋をとることができる。

結 果

雲岡、龍門、響堂山は華北地方を代表する石窟であり、それぞれが時の政治勢力と地理的、精神的に非常に近い関係にあった。これらの石窟の関係を明らかにすることで、当時の「ヒト」がどのように動いていたかをある程度あきらかにできる。雲岡、龍門、響堂山はそれぞれ異なる特徴を持ちながら、同時に深いつながりを持っており、それは北朝文化の独自の発展ととらえてよいだろう。響堂山石窟中心柱窟に現れる変化をどうとらえるかは依然として重要な問題であり、もともと四面に仏龕を現していたものを、三面あるいは一面にするということはどう考えるかは今後の課題である。単なる形式の変化ととらえれば、北斉政権と西域諸国との交流関係から見て、西域石窟の影響ととらえてよいように思える。あるいは佛教教学に対する理解の変化の面から考察をおこなうべきかとも考える。北斉造像についてもギョウ城を中心として新しい技法や構図が生み出されており、北斉期の旺盛な創造活動の源についても北斉内部の文化的伝統と当時の国際情勢などの面から踏み込んだ考察が必要

となるだろう。その場合でも、本研究で明らかになったように、雲岡、龍門、響堂山と続く北朝の伝統が軸としてあり、そこに西域あるいは南朝からの影響がどの程度、どのようにあらわれているかということが問題になるだろう。そうした視点からの研究が進めば、南北朝時代に続く隋唐文化の多様さ、複雑さを解くひとつの鍵となるはずである。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より学術研究奨励金を賜りました。また、現地調査にあたっては中国社会科学院考古学研究所の李裕群先生、朱岩石先生ならびに雲岡石窟研究院、龍門石窟研究院および峰峰鉞区文物保管所の方々にお世話になりました。ここに記して関係者の皆様にご心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 水野清一・長廣敏雄：雲岡石窟 西暦五世紀における仏教寺院の考古学的調査報告（全16巻）、京都大学人文科学研究所、1951-1956。
- 2) 宿白：雲岡石窟分期試論（中国石窟寺研究）、pp. 76-88、文物出版社、1996。
- 3) 宿白：平城実力の集聚和「雲岡模式」の形成与発展（中国石窟寺研究）、pp. 114-144、文物出版社、1996。
- 4) 龍門物保管所、北京大学考古学系：中国石窟 龍門石窟（1、2）、文物出版社、1991・1992。
- 5) 水野清一・長廣敏雄：河北磁県・河南武安 響堂山石窟河北河南省境における北齊時代の石窟寺院、東方文化学院京都研究所、1937。
- 6) 峰峰鉞区文物保管所、芝加哥大学東亜芸術中心：北響堂山石窟刻経洞 南区1、2、3号窟考古報告、文物出版社、2013。
- 7) 河南省文物研究所編：中国石窟 鞏県石窟、文物出版社、1989。
- 8) 新疆維吾爾自治区文物管理委员会ほか：中国石窟 克孜爾石窟（1-3）、文物出版社、1989・1996・1997。
- 9) 国家文物局主編：中国文物地图集河北分册（上・中・下）、文物出版社、2013。
- 10) 山西省文物局：中国文物地图集山西分册（上・中・下）、中国地图出版社、2006。
- 11) 国家文物局主編：中国文物地图集河南分册、中国地图出版社、1991。
- 12) 魏正中：区段与組合—龜茲石窟寺院遺跡的考古学探索、上海古籍出版社、2013。
- 13) 嚴耕望：魏晋南北朝佛教地理稿、上海古籍出版社、2007。